

十勝産ビート 今年も全道一 過去10年4番目 18年生産量168万トン超 糖度も平年水準17.3%

2019年2月7日

十勝管内の2018年産ビートの生産量は、前年比7.2%減の168万4191トンだった。大豊作だった前年からは落ち込んだものの、ここ10年では4番目の実績で、生産量全道一は維持した。平均糖度は0.1ポイント上がり、17.3%と平年並みの水準となった。

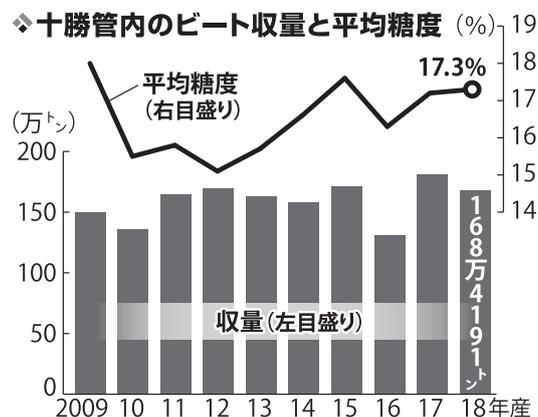
道農政部がまとめた。砂糖の原料となるビートの生産量は、十勝とオホーツクが二大産地で、全道の8割以上を占める。生産量は作付面積で上回る十勝がほぼトップだが、台風の影響などで不作だった16年や09年はオホーツクを下回っている。

18年の管内市町村別では帯広市が22万7430トンで最多となり、全道でも最も多かった。音更町（20万4697トン）と芽室町（20万1819トン）も20万トンを超えた。

1ヘクタール当たりの収量は中札内村が77.31トンと全道でもトップ。ほかに70トンを超えたのは芽室町（73.77トン）、帯広市（72.73トン）、更別村（71.63トン）、幕別町（70.31トン）。十勝平均では67.19トン、全道平均は63.11トンだった。

管内ビートの糖度は全道平均からも0.1ポイント上回り、13市町村で17%を超えた。最も平均糖度が高かったのは新得町と清水町の17.6%。

十勝総合振興局農務課は「昨年の秋は、昼と夜の寒暖差が大きい日が多くなり、糖度は平年レベルになった。ただ、6～8月の天候不順で生育は悪く、生産量は伸びなかった」とみている。



新嵐山にワイナリー 芽室の農家らが会社設立

2019年2月18日

【芽室】芽室産ブドウでワインの醸造を目指す「芽室ワインカウンティ」の生産者らが、ワイナリーの建設・運営に向け「めむろワイナリー株式会社」を設立した。新嵐山スカイパークでのワイナリー建設を想定、2020年の着工・竣工（しゅんこう）と醸造、21年のワイン販売を目指す。町内の農業、尾藤光一さん（55）＝尾藤農産代表＝が代表に就任した。

18日午前9時半から記者発表した。

資本金は800万円で、生産者5人を含む役員8人が出資。芽室ワインカウンティ（昨年10月にMEMUROワインヴァレー研究会から名称変更）では、4年前から町内でブドウの栽培に取り組んでいる。現在は10軒・約5ヘクタールで池田町産の清見、清舞、山幸、欧州品種のカベルネソービニオン、シラーなど17品種を栽培している。

ワイナリーは230～330平方メートル（70～100坪）の規模を想定。ワイナリー設立に向け、池田町ブドウ・ブドウ酒研究所元製造課長の廣瀬秀司さん（67）が醸造責任者として着任した。当面は廣瀬さんを中心に生産者も醸造作業を担う。将来的にはブドウの作付けを10ヘクタールまで増やし、4万～4万5000本を生産する。

廣瀬さんは「山幸、清舞、清見、ツバイゲルトは十分なものが造れる。造り方を少し変えれば池田とは全く違うワインができる可能性がある」とする。



めむろワイナリーを設立した尾藤さん（右から4人目）らメンバー